

フランシスコ・ザビエル溝部脩司教「聖週間説教」～2005年～

於：カトリック桜町教会



聖香油ミサ（3月23日）

本日は「司祭の日」にあたっております。ご存じの通り司祭は司教の司祭職にあずかって司祭となります。従って司祭と司教というのは秘蹟的なつながりを持っております。今日、司祭の皆さんと、司教と司祭の関わりについて考えるお話をさせていただきます。

「教会法」の375条にはこういう風に言っております。「司教は神の制定にもとづき付与された聖霊によって使徒の座を継ぐ者であり、教理の教師、聖なる礼拝の司祭及び統治の奉仕者になるように教会の牧者としてたてられる」司教は使徒の座を継ぐ者、ペトロとその仲間、すなわち使徒達の跡を継ぐ者であり、この2000年間カトリック教会は統治の形は時代によって変わってはいても、司教によって統治されて参りました。

司教の権威とは何でしょう。375条には「教えに関して」、それから「典礼に関して」そして「司牧の方針に関して」、司教は絶対の権威を有していると教えています。

今、司祭は、心を合わせて、自分の司祭職の更新をしました。その更新の中に司教への従順も含まれております。司教への従順というのは、何にでも従うという意味ではありません。3つの事に関して、司教に従わないといけません。「教えに関して」、「典礼に関して」、それから「司牧の方針に関して」。この3つの点に関しまして、基本的な司教のものの見方に同意し、従順である必要があります。あるいはそれを一緒に守っていく必要があります。

近年、カトリック教会は2つの問題で大きく悩んでおります。その1つの問題は、今まで、というのは少なくとも30年、40年、50年前まで、司教の権限は絶大に大きいと考えられました。司教がなんでも決めることができると思われてきました。あるいは親爺的なパトリアルト的な司教が立派な司教であるという風に考えられていました。司祭には絶対服従を強いました。あるいは、強いることができました。私が知っている司教達は、かなり強大な力と、権限によって、司祭に命令し、信者に従わせることができた時代に生きていました。従って、司教に個人的に許可を受ければ何でもできるという時代でもありました。

でも、そのころは司祭達も信徒達もそういう時代だと考え、不満があってもそんなものだと考え従いました。今、別の時代が訪れています。司教は、司祭や信徒達の意見を聞き入れ、それに従わなければいけない、あるいは何も一人で決めてはいけないという考え方が強くなっています。これは世俗主義の時代であり、相対的な価値観の時代の影響を受けています。ニューエイジの時代でもあり、ポストモダンの時代でもあります。私たち司祭も、その時代の影響を受けております。

民主的なものの見方が蔓延して、民主的に全員でコンセンサスがないと上長は何も決めてはいけない時代にもなっております。司教は司祭や信徒に諮らないと何にもしてはいけないということにもなります。

でも、気をつけませんと「教区は一步も進まない」という可能性があります。そして司教への従順というのを、根こそぎにしまいます。以上のようなことの前に、教会は私たちに確かな知恵を提供してくれております。

「教会法」の495条はこういう風に言っております。「各教区において、司祭評議会すなわち司教の諮問機関として、司祭団を代表する司祭の集団が設置されなければならない」。この文書に2つのことがあります。1つは司教が何でも自分でやってはいけないということ、もう1つ、司祭は司教と一緒に教区を考えないといけないということ。司教は司祭にどうしても諮問しなければいけない事項があります。その事項は、最後の決断は司教がやるといっています。でも、司祭団の重みということを教会法は訴えております。同じように司祭職にも司教への従順、司教への恭順というのは何であるかということをお教えしてくれております。何でもすべてにおいてではなく、教区の運営においてある事柄に関しては必ず司教と一致していかないといけないということです。

先程のこの2つの両極端をさけるため、教会法は司祭評議会とそれから信徒による司牧評議会設置を司教に義務づけております。司教は、信徒と司祭の委員会を2つの両輪として利用して、教区を統治しなければいけません。

従順というのは、こういう事です。司教と司祭評議会が、一致して決めた方針に対する従順なのです。そしてその方針というのは、先ほど言いました「教えに関して」、「典礼に関して」、それから「司牧の方針に関して」です。これらを司祭評議会は決めていかなければいけません。そしてそこで決定したことに従順があるのです。従順というのは、これらの諮問機関を通して示された司教の意向への従順です。

これに真っ向して反対で従えないと言うのなら、教区の中で司祭職を奉仕することはできません。ましてや司教への個人的な反撥から従わないということでしたら、はや教区は

成り立ちません。司教と司祭はこの3つの点に関して1つになる，これが教会が伝えている2000年の知恵です。私たち高松教区においてもこれに従って行きます。

そのためには司教は，司祭と信徒の意見を良く聞く必要があります。それから，その司祭と信徒の諮問機関をよく利用しないといけません。名前だけの組織にしてはいけません。同様に，司祭評議会も司牧評議会も自分たちの意見だけ持ってきてはいけません。評議員の方々は司祭の意見を絶えず聴取し，答申しないといけません。信徒の司牧評議員も信徒の意見を必ず収集して，それを司教に答申するというプロセスを経ることが大切です。自分の意見だけでしたら，委員会は成り立ちません。しかし，それを聞いた上で，よく相談した上で，決定するのは司教です。そのプロセスを経ての決定に，司教への従順ということが，先ほど申し上げたように，出て参ります。

今日司祭の日に当たりまして，司教と司祭との関わりを「教会法」からまとめてみました。

高松教区のためには，今何がいるでしょう。司教が方針を出せば皆が従うということではありません。司祭達と一緒に1つの方針，特にこの3つの点に関して，「教えに関して」，「典礼に関して」，「司牧方針に関して」，1つの方針を共に共有する従順が求められます。

この教会の知恵を大切にしながら，私たちは高松教区の歩みの第一歩としたいものです。このことを，この御ミサの中で司祭相互のためにお祈りしましょう。また先ほども申しましたように，下僕であります司教のためにもお祈り下さい。



聖木曜日ミサ（3月24日）

今日の第1朗読の中で「あなた達のいる家に塗った血は，あなた達のしるしとなる」という言葉が使われます。「しるし」となる。エジプトで，子羊の血を鴨居に塗った家を天使が過ぎ越していきました。ここから，過ぎ越しと呼ばれています。天使が過ぎ越していった所は，その家の子供は殺されませんでした。過ぎ越しっていったということは，その人が救われたということを表しております。過ぎ越し祭というのをユダヤではいつも行っておりましてけれど，神が天使を使わして天使が過ぎ越していった，鴨居にある「しるし」を見て過ぎ越していった。それを通して救われたということを表しております。

現代の「しるし」というのは洗礼です。洗礼を受けた私たちを天使は過ぎ越していきます。水という「しるし」を受けましたので、天使が過ぎ越して行って私たちを約束の地に導きます。これが救いです。私たちは救われた民です。こんなに罪深い悲しい性を持つこの私を神さまは救われます。これを感謝する祭り、それが過ぎ越しの祭りです。「この過ぎ越しの夜にイスラエルの民は酵母を入れないパンと苦菜を添えて食べました。」と第1の朗読で言うております。エジプトを出たとき、パンをイスラエルの民は食べます。「それを食べる時は腰帯を締め、靴を履き、杖を手にし、急いで食べなさい。」と命じられました。過ぎ越し祭ではパンを食べます。イエス様も過ぎ越しの祭りにパンを割いて食べました。パンと羊の血、これが過ぎ越し祭の2つの「しるし」です。今私たちにはパンとそれから血と、この2つが与えられます。それは、私たちは水という洗礼を受けた「しるし」を持っているからです。パンを食べ、血を飲む人はそれによって救われます。約束の地に導かれます。力が与えられます。現代の「しるし」過ぎ越しは、ミサの中で供えられるパンです。

このパンを食べるごとに、私たちは何を思い出すのでしょうか。「このパンを食べ、この杯を飲むごとに主が来られるときまで、主の死を告げ知らせるのです。」と、今日の第2のパウロの手紙で言うております。パンを食べるたびごとにイエス・キリストが十字架上で亡くなったこと、それによって私たちが救われたこと、あの方は私たちのために亡くなって下さったこと、こんなことを告げ知らせます。人々に伝えます。そのために私たちは感謝します。「ベラハーの祈り」と旧約聖書で言うております。感謝の祈り、過ぎ越しは感謝の祈りの祭りです。洗礼によって清められて、パンによって養われた私たちは今救いの道を歩んでいます。

それでは、救いの道を歩むというのはどういうことでしょうか。イエス様は食事が終わって弟子たちの足を洗います。そして、同じことをするようにと弟子たちにお命じになります。そうなんです。救いの道を歩むというの、お互いの足を洗うことです。パンを食べ、洗礼の水を受けた私たちは、救いの道を歩むためには、この隣の人を洗わないといけません。隣の人に奉仕することを学ばないといけません。自分の好きな人たちとだけ、自分の仲間とだけいる、こういう愛し方ではありません。友のために命を捨てた、一番必要な人のために命を捨てた、あのイエス様の愛を生きるために私たちはパンを食べます。ミサに与るたびごとに、私たちは人を愛し人に奉仕するということを学ばなければなりません。これが救いの道を歩むということです。

今日このミサに与るとき、自分の中に人に対して何か含むことがあれば、赦しを願わないといけません。自分が正しいと思いこんで人を裁いていれば、まず自分自身を正さないといけません。だれもこの教会の場所で人を裁いてはいけません。今日、この聖木曜日の祝日、洗礼を受けて救いの道を歩み始めていること、聖体をうけて素晴らしい力が与えられていること、これらを感謝して私たちは愛するということを誓い合いましょう。教会に生きるということは、愛するということを誓うということです。周りにいる人を大切にすること。人に対しての深い思いやりに生きること。今必要な人に、その人の必要に応えていくこと。自分が思う通りではなく、その人の必要に応えていく、こんな生き方を学ぶことが大事です。

人の必要に確実に応えることを学び、そして祈るミサにいたしましょう。最後にヘブライ人への手紙の2章を読んでこの話を終わりたいと思います。ゆっくり読みますので後から考える材料にしてみてください。

「イエスが死の苦しみによって、栄光と誉れの冠をお受けになったことを、私たちは知っている。その死は神の恵みによって、すべての人のためのものであった。神が多くの子を栄光に導くために、その救いの創始者を多くの苦しみを通して、全うさせたということは万物の存在の目的であり、原因である方としてふさわしいことであった。」

私たちのためにイエス様が神から遣わされたこと、私たちのために死んだこと、これらを考えたら、私たちが何をしなければいけないかという問題を、私たちに提起しております。今日、明日、明後日と三日間にわたって、光と闇を考えさせてくれます。神の恵みによって生きる自分の正しさ、こんなことを考える三日間にいたしましょう。



聖金曜日ミサ（3月25日）

本日は昨日の話の続きをいたします。ミサの話を昨日しました、今日はミサは「いけにえ」であるというお話をいたします。

私たちは十字架の主を見上げます。十字架の主はご自分を人々のために、私たちのために、上に向かって捧げておられます。私たちはその十字架の主を見上げて、私たちも捧げ

ます。父なる神様は、上から十字架のイエス様をご覧になります。そして、一緒に私たちもご覧になります。そして、イエス様の捧げ物と私たちの捧げ物両方をご覧になります。そして受け取って下さいます。私たちのいけにえは、父なる神さまが受け取ってくださいます。

イエス様は誰のために自分を捧げるのでしょうか。人類のためです。特に罪と悲しみにあえぐ人々のために、お捧げになります。私たちは誰のためにミサの中で自分を捧げるのでしょうか。罪と苦しみにあえぐ人々のために、私たちは自分を捧げるのです。私たちは、人々のために捧げられるいけにえなのです。ミサに与るというのは、人々のために自分を捧げるということを表しています。そのために洗礼を受けたのです。このことのために信者になりました。自分の楽しみに、ミサがあるのではありません。自分たちの教会の結束を固めるためだけに、ミサがあるのではありません。自分たちの友情とか家庭を固めるためだけに、ミサがあるのではありません。全人類のために捧げる、これがミサです。私たちは全人類のために自分を捧げるために、ここで集まっているのです。だから選ばれた民、教会に入った者なのです。

今イエス様の十字架は、下を見つめております。人間の悲しみをじっと見つめておられます。人間の悲しみをじっとご覧になって、父なる神さまに持って行かれるのです。いけにえ、あるいは仲介者イエスという言葉があたります。ミサに与る私たちも、人々の悲しみをじっと見つめないといけません。自分の悲しみもじっと見つめないといけません。宗教は遊びではありません。その悲しみとは、私たちの老齢かもしれません。私たちの病気かもしれません。私たちが持っている人間関係のもつれかもしれません。家庭の問題かもしれません。子供の問題かもしれません。しっかりとこれを見つめて、私たちはミサの中でこれを捧げます。

世界の問題かもしれません。イラクの戦争のことで心が痛むでしょうか。壊された家族の痛みを感じているでしょうか。殺されていく子供のその悲しみとその母親の痛み、こんなものを感じているでしょうか。感じたらこれを捧げる、これがミサです。従って「信仰の神秘、主の死と復活を告げ知らせる」とミサの中で歌います。そうです。ミサは神秘的なのです。私たちの頭ではわかりません。でも信仰を持っていれば、私たちは全人類のすべての人のために、ここにミサに与るということが分かります。これこそ偉大な神秘です。

しかし、その後で「主の死と復活を告げ知らせる」と歌います。私たちが主の十字架を見つめるとき、その向こうに主の復活が見えています。この世は十字架に終わりません。悲しみに終わりません。苦しみに終わりません。その向こうに、復活された主がおられま

す。大切なのは、今しっかりと十字架を見つめることです。そしてその向こうに光り輝く栄光を見つめることです。

教会への奉仕というと、平和行進ミサとかいろいろな活動をお考えになるかもしれませんが。でも、一番大切な奉仕は全人類のために捧げるミサに与ることなのです。

どうして、主の日にみんなでミサに与るのですか。それは、全人類のために捧げるキリストのミサだからです。私が少しぐらい平和行進したって、平和が来るのではない。イエス様が下さることなのです。一番大切な奉仕というのは、全人類のために捧げるミサなのです。この意味で、ミサこそ人々を救いに導く最高のわざです。主日のミサは教会のいのちです。どうしても良く準備しないといけません。

主日のミサをどうするかということを、教会の委員会も典礼の担当者もしっかりと考えないといけません。それはミサは教会のいのちだからです。というのは、それこそ全人類のために捧げるミサであり、カトリック教会が存在しているというのはこのことのためだと、こんな事を考えさせてくれております。

明日、明後日と続いて、闇と光に関する話をいたしたいと思っております。



復活徹夜祭ミサ（3月26日）

最初、闇がありました。それから、ローソクと光がありました。それから歌がありました。今から水があります。今日はたくさんのシンボルで一杯です。でも今日は「闇」というテーマだけでお話をまとめて、明日「光、復活」というお話をさせてください。

闇とは何でしょう。闇とは迷いの状態です。今日は、闇から光の道を歩んできました。私たちの心の闇を打ち払ってくださるのは神さまです。私たちが自分で自分の闇を打ち払うことができません。イエスの教えそのものが、私たちの心の闇を打ち破ってくださいます。ということは、私たちはイエス様の教えに心の目を開かなければ、闇が破れないということです。光は見えないのです。自分に光があると思っている人は光が見えません。

光はここにあります。問題は、自分が開くか開かないか。ここにすべてのものの鍵があ

ります。光は闇があって輝きます。闇を体験していない人は、光のありがたさがわかりません。不夜城のような現代社会は光がとってもわかりにくいです。闇が暗ければ暗いほど、星の輝きは美しく輝くものです。私はソロモンという島で、新しく宣教地あるいはサレジオ会の教会並びに学校を創設いたしました。そのとき最初に行きましたときに、空の星がどんなに綺麗かを自分で体験したような気がしております。その昔若かった私はアルプスで遭難したことがあります。アルプスの氷の崖をくだらないといけなかったこと、道に迷ってしまったこと、下山してそして暗くなって真っ暗闇の中を歩いて、その向こうにぽつんと山小屋の光が見えたときにどんなにうれしかったか。いまでも、その感動を忘れることができません。次の日搜索願が出ていたのを私は知って、ひどく私の院長から怒られたのを良く覚えております。

聖パウロはこの闇というのを、「うめく」という言葉で表しております。聖アウグスチヌスは「幸いなる罪よ」と叫んでおります。人の罪とか、過ちとか、悲しみということを知らない時に光は見えません。きれい事を言っている人は光が見えません。どろどろとなった自分の中を見つめるときに初めて光が見えます。教会は綺麗なことを語り合う場所ではありません。過ちと汚濁の中でうめく人々の集まり、それが教会です。罪をなめあうために私たちは集まっているわけではありません。キリストという光によって立ち上がるためにここに集まっております。今復活祭をお祝いする前に、自分の心の一番深いところを見つめてみましょう。何があるんでしょう。その一番深いところを清められたときに、初めて光が見える、こんな事を私たちに、今日の祝日は考えさせてくれております。



復活の主日ミサ（3月27日）

復活祭と申しますと、弟子たちが復活したことをすぐ信じたと思われるかもしれませんが。でも今日の福音も次の日曜日とその次も、聖霊降臨までは、弟子たちは復活を信じておりません。教会が始まって、すなわちイエス様がこの世を去り聖霊が下って初めて、復活があったと弟子たちは信じるようになります。今日の福音書を読んでいたら、復活があつて素晴らしかった、ということは決して言うておりません。その意味で復活節の日曜日は、福音を続けて読んでいかれると、聖霊降臨までが1つの固まり、ブロックであるということがわかりだと思ひます。

まず、マグダラのマリアが墓に行きますと、石が取り除かれていたと言っております。石というのは何でしょう。心にしこりとして残っているもの、これが石です。神様はこの石を取り除いてくださいます。復活というのは、私の心にしこりとして残っている石を取り除くことです。その石というのは罪であり、死なのです。具体的にはわだかまりとか、嫉妬、争い、ねたみ、憎しみです。この私の中にくすぶり続けているしこり、あぶくみたいなものを、神様は取り除いてくださいます。これが復活です。それでも、そのしこりやあぶくは、私たちの心の根っこの中にしっかりと残ります。この根っこの罪を滅ぼしてくださるのが、主だということです。あるいは、神様しかそれができないと言っております。

イエス様の復活をお祝いするというのは、「この私たちの中にくすぶり続けている根っこの中にある罪を、きれいにしてくださる主がいるということを信じる。」、それが復活の信仰です。私たちのこの石を取り除いてくださるのは、神様だけです。あの方はすべてを取り去ってくださって、新しい命の息吹を私たちに与えてくれます。私たちの石とは、生活のこと、仕事のこと、人間の関係のこと、自分との関係のこと、いろいろなことを通してしこりが残っております。これらのうまくいかない部分が、私たちの生活を重くしています。その根っこには、実は自分に抜けきれない罪があるからです。神様は、その根っこの部分であるその罪に触れてくださいます。これが救いであり、復活であると言えます。

昨日申しました自分の根っこにあるこの罪、根っこにあるこのしこりに気付かない人は復活とか救いということを決して体験できません。石にさらされているというのはこの世の思いで一杯の状態のことを指しております。目の前のことだけを見つめて、そこから一歩も抜けきれない状態、これが石にさらされているということを指しています。そして人間の力でどうにかどうにか乗り切ろうと焦ります。

大切なのはあの方に頼るということ、そういう姿勢を持つということです。信仰というのはそういうことなんです。あの方に頼る。復活した主は、弟子たちに自分の方から会いに来られます。復活というのは主が会いに来られて、そして出会ってもらえるとき、初めて可能になります。私がではなくて、あの方が私に会いに来てくださるときに、初めて私のこの根っこにある石が取り除かれます。私が今日お願いしているのは「主どうぞ私の所に来てください。そして、私の根っこにあるこの石を、このしこりを取り除いてください。」という祈りをするということなんです。

振り返ってみますと、若いときからどれほど私たちは悩んだことがあるでしょう。しかし今になって考えてみますと、その大半を憶えておりません。たぶん深いトラウマになっ

ている過去の出来事もあるでしょう。自分の力ではどうしようもない大きな過ちもあったでしょう。それは全部トラウマとなって心の奥底に沈んで、深い重しになっております。思い出してみますと、自分が小さかったこと、ある思いにとらわれそこから一步も抜けきれなかったこと、どうしてもそれでないといけないと思いこんだこと、これらが全部原因となって私の心を重くしております。トラウマになっている大きな傷の場合は、人間の力ではどうしようもないという無常感に駆られることもあります。それぞれ振り返ってみたら自分の心の奥底に傷があります。大きい小さいかトラウマがあります。そしてそのトラウマ、その傷に触れていただくこと、これが復活なのです。それをイエス様はやって下さいます。私の心の傷を担い取り去ってくださるのは、主だけです。罪とは自分の力でそれを何とかしようとする、これが不信仰であり、罪なのです。

復活の主に出会うことで弟子たちは変えられます。復活というのは甦った主と出会うことです。新たな形で主と人々が出会う、これが復活です。そして復活された主は、新しい使命をお与えになって全世界に行けとお命じになります。私たちは、主が伝える言葉を伝える務めを持っております。そのために主と出会いました。今ここで、自分の一番心の深いところで、主と出会った私たちは、出会ったその喜びを人々に伝えるということをしなないといけません。

今年のあなたの復活祭はどうだったでしょう。ただ単にお決まりの年中行事の1つでしたか。この聖週間を通してしっかりと自分の人生を見つめる、そしてこの復活の祝いを祝っているあなたでしょうか。昨日の光と水の典礼に与って、あなたの心は感動しましたか。新しい生き方に変わるということを感じておられますか。復活というのはこういうことなんです。ただ単に外的な行事をしたとかいう事ではない。自分の内面を深く見つめ、そこに復活した主と出会って新しく生きるというわざを行うことです。

最初に申しました今日の復活の場面も、次の週からの場面も、決して主に出会っていない人たちのことばかりが出て参ります。聖霊が下って、初めて主と出会うということが行われます。再度お勧めします。続けて来週再来週と、聖霊降臨まで1つ1つの福音をゆっくりと読んで、復活ということをお考えになってみて下さるようお願いいたします。

